

平成27年12月30日(水)

老球の細道197

2015年第46回ウインターカップ雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

高校バスケットボールの祭典ウインターカップが終了した。女子決勝においてドラマがあり、久しぶりに涙ながらに観戦できた大会となった。

まだ現役の指導者であった頃は、ウインターカップの時期を狙ってよく関東遠征試合をしたものである。佐藤光彦先生(現U-16男子日本代表コーチ)率いる大宮北高校を拠点にして関東地区のみならず、全国からそこに集まって来る強豪チームと練習試合をさせてもらった。最終日は東京体育館でウインターカップの試合を見て会津に帰って来た。生徒達に全国大会を生で見せ、高い意識と目標に目覚めさせることをねらいとした。会津高校時代はOBの荒井康雄氏の計らいで在京会津高校バスケットボールOB会が東京や大宮で焼肉パーティーを開いて生徒達をねぎらってくれたのは良い思い出である。

昔はウインターカップを直接観戦するために東京体育館まで行かなければならなかったが、今ではCS放送で全試合生中継で見ることができるようになった。最近では東京まで行くのがおっくうになり、家でテレビによる観戦が多くなった。体育館で生で観戦するのと違って、途中で孫娘の逆襲にあったり、年末の宅急便配達にじゃまされたりして、観戦の集中度合いは低下したが、1回戦から見れるメリットがあり多くの試合が楽しめる。

特に福島県代表の福島南高校と福島西高校の試合は見逃せなかった。両チーム共福島県のトップレベルの選手とコーチが集まっており、再来年の福島インターハイに向けて着実に強化を進めている。福島南高校は主力がすべて1、2年生の下級生主体のチームであるので1回戦突破は厳しかった。しかし積極的な戦い方には来年に向けての明るい展望が見えた。福島西高校は3回戦進出を果たし、強豪安城学園にも今1歩まで迫ったが惜敗した。両チームとも1:1の個人技とアウトサイドシュートの精度に課題が残った。

最近の上位に進出するトップチームは、例外なく外国からの留学生や他県からの選手で多くが構成され、地元の選手だけでベスト8以上は厳しい現実となっている。そんな中で、地元の選手だけでチームを構成する会津地区や福島県のチームは、今後どのようにすれば全国のトップレベルと渡り合えるようになるのか。あきらめるか、他の方法で現在の状況を克服するか、与えられている課題は大きくて難しい。

今大会最も感動したのは女子の決勝戦である。高校3冠3連覇を狙う名門桜花学園を、選手のキャリアで劣る岐阜女子高校が逆転勝利をおさめた。両チームとも外国人やハーフの選手を要するが、要所要所で勝負を決めていたのは日本人選手たちであった。特に岐阜女子の勝負どころで決めていたアウトサイドシュート力は素晴らしいの一言であった。

優勝インタビューで語った監督の談話に高校バスケットボールの全てが示されていた。「負けた回数の方が多い。でも負けて悔しい思いは次につながるエネルギーになる」。また、選手が気の抜けた練習をしていると「体育館の隅からバスケットボールの神様が見てるんだ」と注意を与える。故吉井四郎氏の有名なバスケットボール哲学である。

コートの中に散らばった優勝テープの散らかりを試合後に後かたづけしながらコートを去る岐阜女子選手の姿を見て、指導者に課せられた日頃の人間指導の大切さ、そしてバスケットボールの神様は努力する者を見捨てないことを改めて肝に銘じさせられた。